

『イリアス』と『オデュッセイア』の関係に関する一考察

—— Usener の試みを踏まえて ——

川 上 穰

I

ホメロスと呼ばれる『イリアス』、『オデュッセイア』の詩人が同一人物であるのか、異なるのか、両詩の関係はどうであるのかという問題は古来より議論が積み重ねられてきた難問である。両詩には、‘Iterata (反復)’と呼ばれる共通あるいは類似の表現・語句が数多く見られる一方で、矛盾する部分もあり、同一人物の手によるものなのかが問われてきた。「分析論」派の研究者達は、それらの表現・語句を「本物」と後世の加筆・修正部分とに分類し、「本物」のホメロスを探そうと試み、一方、「統一論」派の人々は、それぞれの詩全体（あるいは両詩を通じて）の統一性を見いだそうとした。しかし、Parry によって、それらの‘Iterata’は詩人個人に由来するのではなく、両詩に先行する長い口承詩の伝統を反映していることが明らかにされて以来⁽¹⁾、近年ではこの両詩の関係という問題そのものに真正面から取り組んだ研究はあまり見受けられない。この問題の難しい点は、両詩に先行する詩、あるいは同時代の詩が現存しないために検討するために利用できる材料が両詩のテキストのみであり、その限定された条件下において研究をしなければならないというところにある。そしてまた、現在においては既に多くの学者がこの問題に取り組んで両詩を様々な観点から比較検討してきており、新たな観点を見つけだすこと自体が困難になっている。

しかしながら、両詩の関係について、何らかの説得ある根拠をもって自分の立場を鮮明にすることは、ホメロスを研究する上で重要である。ここでは、論者の見解を明確にするために、‘Iterata’に着目し、『イリアス』と『オデュッセイア』を比較分析しながら、その関係について論じ、一つの見解を出そうと試みている Usener の研究, *Beobachtungen zum Verhältnis der Odyssee zur Ilias* を取り上げる。そして、その内容を検討した上で、両詩の関係についての見解を示すことが本論の目的である⁽²⁾。

II

まず、Usener の研究の内容について紹介する。この書は序論、16章からなる本論、結論からなっている。

(1) 序論

初めに、‘Iterata’を巡る議論の変遷が述べられる。かつて‘Iterata’は、分析論派の学者達が、「本物」のホメロスを探求するための判断材料であったが、Parry によって、口承詩の伝統を証しするものとされて以来、‘Iterata’そのものについて触れられることは殆どなくなった⁽³⁾。そのような現状にあって、Usener は‘Iterata’を通じて『イリアス』と『オデュッセイア』の関係を探ろうとする。彼によれば、口承詩論では、‘Iterata’を‘common stock’⁽⁴⁾に由来する伝統的な定型句とみなすため、詩人個人の創作した句や場面が認められないとして、語句・表現を‘typischen Szenen’、‘individuellen Szenen’⁽⁵⁾とに分類し⁽⁶⁾、後者に両詩の関係を探るべきという主張がされる。

(2) 本論

ここでは、アキレウスとテレマコス、帰国への問い、ポセイドン、アキレウスの盾など、いくつかのテーマを設けて、関連箇所を取り上げ、比較検討している。ここでは主要なものを紹介する。なお、テキストの前の数字は便宜上、論者が付けたものである。

アキレウスとテレマコス(A 245, β 80)

①“Ὡς φάτο Πηλεΐδης, ποτὶ δὲ σκῆπτρον βάλε γαίῃ

χρυσείοις ἥλοισι πεπαρμένον, ἔζετο δ' αὐτός·

(ペレウスの子はこう言うと、黄金の鋌を打った杖を地面に
投げつけて、自分は腰を下ろした。)

(A 245-246)

②“Ὡς φάτο χῳόμενος, ποτὶ δὲ σκῆπτρον βάλε γαίῃ,

δάκρυ' ἀναπρήσας· οἶκτος δ' ἔλε λαὸν ἅπαντα.

(怒りに燃えてこう言うと、涙はあふれ出し、杖を地面に投げ
つけた。すると、憐憫の情が人々皆をとらえた。)

(β 80 - 81)

①は、『イリアス』第一歌の集会の場でアキレウスが、女神アテネの忠告を聞き入れ、アガ멤ノンを斬ることは断念するが、収まらない怒りを表現した場面であり、②は『オデュッセイア』第二歌の集会の場面で、テレマコスが、求婚者たちの狼藉ぶりに怒りを露わにした場面である。共に集会において、同じ行動をもって怒りを表現する場面であり、『オデュッセイア』の詩人は、ここで『イリアス』における怒りのモチーフを取り込んだといえる。

帰国への問い (B 173f., ε 203.)

③ διογενὲς Λαερτιάδη, πολυμήχαν' Ὀδυσσεῦ,
οὕτω δὴ οἴκονδὲ φίλην ἐς πατρίδα γαῖαν
φεύξεσθ' ἐν νήεσσι πολυκλήϊσι πεσόντες,
(ゼウスの血を受ける、ラエルテスの子、機略縦横のオデュ
ッセウスよ、お前たちはこんな調子で、多くの漕ぎ座を持
つ船にとび乗って、自分の家を目指し故国へ逃げ帰るのか、)
(B 173 -175)

④ Διογενὲς Λαερτιάδη, πολυμήχαν' Ὀδυσσεῦ,
οὕτω δὴ οἴκόνδὲ φίλην ἐς πατρίδα γαῖαν
αὐτίκα νῦν ἐθέλεις ἰέναι; σὺ δὲ χαῖρε καὶ ἔμπη.
(ゼウスの血を引く、ラエルテスの子、機略縦横のオデュ
ッセウスよ、そういうことで、あなたは今すぐ故国へ帰りた
いのですか。それでは、ごきげんよう。)

(ε 203-205)

③は、『イリアス』第二歌で、故国へ帰るために船に向かうオデュッセウスにアテネが引き留めの言葉をかける場面であり、④は『オデュッセイア』第五歌で、カリュプソがオデュッセウスに対して話す場面である。同じ人物に対して用いられている点、Διάπειρα (試し) のモチーフを使っているという点で共通している。

アキレウスの死 (Π 775., ω 39.)

⑤ μαρναμένων ἀμφ' αὐτόν· ὃ δ' ἐν στροφάλιγγι κονίης

κεῖτο μέγας μεγαλωστί, λελασμένος ἵπποσυνάων.

(ケブリオネスの周りで戦っていた。その彼は渦を巻く砂塵
の中で、馬を御す術も忘れて巨体を長々と横たえていた。)

(Π 775-776)

⑥ μαρνάμενοι περὶ σείο· σὺ δ' ἐν στροφάλιγγι κούρης

κεῖσο μέγας μεγαλωστί, λελασμένος ἵπποσυνάων.

(そなたの周りで戦っていた。そなたの方は渦巻く砂塵の中
で、馬を御す術も忘れて、巨体を長々と横たえていた。)

(ω 39-40)

⑤は、『イリアス』第一六歌で、パトロクロスに討たれたケブリオネスが横たわっている場面であり、⑥は『オデュッセイア』第二四歌で、アキレウスが討たれて横たわっていた様をアガ멤ノンが描写する場面である。また、アイティオピスとの関連から、これらの箇所が関係あるものとされる。

アキレウスとオデュッセウス (Φ 281, ε 312)

⑦ νῦν δέ με λευγαλέω θανάτῳ εἴμαρτο ἀλῶναι

ἐρχθέντ' ἐν μεγάλῳ ποταμῷ ὡς παῖδα συφορβόν,

ὄν ῥά τ' ἐναυλος ἀποέρση χειμῶνι περῶντα.

(それが今、私は大河に閉じこめられて、悲惨な死を遂げる
運命にあるのです、冬の川を渡っていて、奔流に流される
豚飼いの子どものように)

(Φ 281-283)

⑧ τῷ κ' ἔλαχον κτερέων, καὶ μεν κλέος ἦγον Ἀχαιοί·

νῦν δέ με λευγαλέω θανάτῳ εἴμαρτο ἀλῶναι."

(そうすれば、葬儀を営んでもらえたであろうし、アカイア
人たちが私の誉れを伝えてくれたであろうのに。だが今や、
悲惨な死を遂げる運命が定まっているのだ。)

(ε 311-312)

⑦は、『イリアス』第二一歌で、アキレウスがスカマンドロス川で死にそうになる場面であり、⑧は『オデュッセイア』第五歌で、オデュッセウスが海でおぼれそうになる場面である。ここで『オデュッセイア』の詩人は、川の神との戦いのモチーフを取り入れている。

アポロンとカリュプソ(Ω 33, ε 118)

⑨ σχέτλιοί ἐστε θεοί, δηλήμονες· οὐ νύ ποθ' ὑμῖν

Ἑκτωρ μηρί' ἔκτε βοῶν αἰγῶν τε τελείων;

(神々よ、あなた方は苦しみを与える残酷な方々だ。ヘクトルがあなた方に、牛や傷一つない山羊の腿を焼いて供えたことがかつてなかったろうか。)

(Ω 33 -34)

⑩ Σχέτλιοί ἐστε, θεοί, ζηλήμονες ἐξοχον ἄλλων,

οἳ τε θεαῖς ἀγάσθε παρ' ἀνδράσιν εὐνάζεσθαι

ἀμφαδίην, ἣν τίς τε φίλον ποιήσεται ἀκοίτην.

(神々よ、あなた方は他の者より嫉み深く、残酷な方々です、女神が人間の男と同衾するのを快く思わない、公然と自分の夫に選んだとしても)

(ε 118 -120)

⑨は、『イリアス』第二四歌で、ヘクトルの遺体がアキレウスによって乱暴に扱われているのを見たアポロンが怒りを表す場面であり、⑩は『オデュッセイア』第五歌で、ヘルメスによって伝えられたゼウスの言葉に怒る場面である。神に対して同じモチーフを示していることより、『オデュッセイア』の詩人が『イリアス』のこの箇所を取り入れたことが分かる。

ヘルメス(Ω 333 -348, ε 28 f.)

⑪ αἶψα δ' ἄρ' Ἑρμείαν υἱὸν φίλον ἀντίον ἦῤδα·

Ἑρμεία, σοὶ γάρ τε μάλιστά γε φίλτατόν ἐστιν

ἀνδρὶ ἑταιρίσσαι, καὶ τ' ἐκλυες ᾧ κ' ἐθέλησθα,

βάσκ' ἴθι καὶ Πρίαμον κοίλας ἐπὶ νῆας Ἀχαιῶν

ὥς ἀγαγ', ὥς μήτ' ἄρ τις ἴδῃ μήτ' ἄρ τε νοήσῃ

τῶν ἄλλων Δαναῶν, πρὶν Πηλεΐωνα δ' ἰκέσθαι.

(直ちにわが子ヘルメイアスに向かって言った。

「ヘルメイアスよ、お前は人に付き添ってやるのが誰よりも好きであるし、気に入った者の言うことをよく聞いてや

るものでもあるから申しつけるが、出かけて行ってプリアモスをアカイア勢の船まで連れてやってくれ、但し、彼がペレウスの子の許に着くまで、他のアカイア人の誰にも見られず、また気付かれもせぬようにな。」)

(Ω 333 - 338)

⑫ ἦ ῥα, καὶ Ἑρμείαν, υἱὸν φίλον, ἀντίον ἤυδα·

"Ἑρμεία· σὺ γὰρ αὖτε τὰ τ' ἄλλα περ ἄγγελός ἐσσι·

νόμφη εὐπλοκάμῳ εἰπεῖν νημερτέα βουλήν,

νόστον Ὀδυσσεύς ταλασίφρονος, ὥς κε νέηται,

οὔτε θεῶν πομπῇ οὔτε θνητῶν ἀνθρώπων·

(こう言うと、次はわが子ヘルメイアスに向かって言った。

「ヘルメイアスよ、お前は他のことでもよく使いに立ってくれる者であるから申しつけるが、忍耐強いオデュッセウスの帰国をかなえてやるという、しくじることのない決定を、髪麗しきニュンフに伝えよ。それは神も人間も付き添わぬ帰国でなければならぬ。)

(ε 28 - 32)

⑪は、『イリアス』第二四歌で、⑫は『オデュッセイア』第五歌で共に、ゼウスがヘルメスに使いの指示を出している場面である。この二つの箇所と他の部分(Ω339-348, ε43-50, α96-98, κ275-279, Ω368-369, π71-72)の比較検討より、『オデュッセイア』の詩人は『イリアス』第二四歌の要素をいくつかに分けて『オデュッセイア』の中に取り入れている。

以上が、本論で取り扱われた主な事柄であり、そして最後の16章では、重要ではない『オデュッセイア』と『イリアス』の類似箇所と題して、A5と λ297, A78と ο274, A303と π441, B58と ζ152など、表現が同一であったり、類似の箇所の組み合わせを29組紹介している。

(3) 結論

本論における考察のまとめがここでなされる。

『オデュッセイア』において、『イリアス』に見られるモチーフや描写をほめかしている部分があちこちに見られることから、『オデュッセイア』の詩人は『イリアス』を知っていたと考えられる。しかし、『イリアス』の筋につ

いて直接的に語られることはない。これは『オデュッセイア』の詩人の目的が、『イリアス』を模倣することではなく、大きな影響を受けながらも創造的な意味で対抗することにあつたからである。『イリアス』の内容を紹介することを意識的に回避するのは、『イリアス』に対する創造的競争のあらわれと見なしうる。また、『オデュッセイア』に多く見られる『イリアス』のほのめかしは、現在の我々に伝わっている『イリアス』と合致しており、『オデュッセイア』の詩人の時代には『イリアス』のテキストは固定化されていて、文字の助けにより継承されていた⁶⁾。

III

以上で示された Usener の見解について検討する。

彼の研究方法はテキストに基づき両詩のいくつかの場面を取り上げながら、比較検討し、必要であれば過去の研究の成果を随所で取り込んでいくというきわめて正当な手法である。しかし、彼の研究の前提として、『イリアス』は『オデュッセイア』に先行するということを自明のものとしているが、その根拠を序論のところで他の学者の説を紹介するに終わっている点が気に掛かる⁷⁾。確かに、『イリアス』の方が『オデュッセイア』よりも年代的に古いものであるというのは現代の通説となっているようであるが、その点についての説明があればよいのと思われる。

さて、Usener が序論で述べたように、‘Iterata’は『イリアス』、『オデュッセイア』相互に見られるのみならず、各叙事詩内においても見いだされる。これらの箇所は両詩間の関係を示すものとして、分析論派を中心に多くの学者が取り上げてきたところであるが、Parry 以降の研究の中では口承詩の伝統によるものとして説明されてきた。その状況の中で、Usener は‘Iterata’の内、それぞれの作者の独自性もしくは、両詩間において相違点を表していると思なされる箇所を検討し、その相互比較を行ったのであり、その着眼点は妥当なものと思われる。しかしながらその方法で行われた考察及びそれによって出された結論はどうであろうか。

彼の考察をここで検討してみる。

まず、本論における分析について検討する。

①、②の解釈であるが、これを怒りのモチーフとして簡単に片づけられるであろうか。確かに、杖を投げるという行為は共通である。しかし、①の怒りは、

この『イリアス』全体を通じて貫かれるアキレウスの怒りの始まりの部分であり、物語の行方全体に作用するほどの力を持っている。それに対して、②の怒りは求婚者達の前に退けられてしまい、この場限りの表現にとどまっている。そのような意味で、両者には大きな質的差があり、単純に『イリアス』の怒りのモチーフを取り入れてるとはいえない。

また、③、④は、帰国へと向かおうとするオデュッセウスへの問いかけという点で共通である。だが、Usener の言うような Διάπειρα (試し) のモチーフが両方に共通するものとしてあるだろうか。両方共に疑問形となっているが、③の方は、故国に変えるために船に向かうオデュッセウスを引き留め、心を変えさせることを目的にしたせりふであり、④のオデュッセウスの気持ちを確かめるためのものとは大きく意味が異なっている。

⑤、⑥は、遺体が横たわっている状態を表現した場面である。ほとんど同じ表現であり、関連するものとして考えられる。但し、アイティオピスとの関連は別に検討しなければならない問題であり、この章でいきなり持ち出してくるのは研究方法として妥当なものとは言い難い。

⑦、⑧は水に巻かれて死にそうになる時に、自分の運命を嘆く場面であるが、この箇所を比較して川の神との闘いのモチーフを取り入れているといえるだろうか。これらの箇所でアキレウスもしくはオデュッセウスは戦場で敵の英雄と戦って死んでいたら名誉であったのに、こんな不名誉な死に方をするのはイヤだという感情をもっており、その点では共通している。が、オデュッセウスが海でおぼれそうになるのは、ポセイドオンが怒りによって、風を吹きつけたからであって、海との戦いによってではない。従って、『オデュッセイア』の詩人がそのモチーフを取り入れたとはいえない。

以上の例から考えるに、Usener は解釈する際、語句・表現上の共通性にとられすぎて、文脈上の相違をおろそかにしていると思われる。

さらに、次の箇所は少し事情が異なっている。

⑨、⑩はゼウスをはじめとする神々に対する怒りをあらわした場面であり、⑪、⑫はゼウスがヘルメスを使いに出す際の言いつけであるが、表現や場面の点で共通点を多くもっており、『オデュッセイア』の詩人が意図してこのような表現をしたといえよう。但し、これらの箇所は、前後の話の筋を合わせて考える必要がある。

これらの箇所は『オデュッセイア』の詩人が『イリアス』の表現を模倣したり、そのモチーフを取り入れて作ったのではない。これらの箇所は、(a)神が

不幸な状態の人間を哀れみ、ゼウスに何とかして欲しいと願い出る、(b)それをゼウスが聞き入れる、(c)使いを送る、(d)使いの神がそれを伝える、(e)相手の応答があり、人間の行動が始まる、というような一連の流れをもったより大きなモチーフの各部分として機能していると考えられる。『イリアス』第二四歌では、⑨が(a)に、⑪が(c)に用いられていると考えられるし、『オデュッセイア』第五歌では、⑫が(c)に、⑩が(e)に用いられていると見なしうる。(b)の内容はゼウスの性格と話の流れから決定されるし、(d)は(c)の繰り返しが基本であるから、(a)～(e)がひとかたまりのモチーフとして存在したと考えた方が合理的だといえる。すなわち、(a)～(e)が一つの‘common stock’として存在しており、両詩の詩人は必要な時に取り出してきて、組み合わせる要素に独自性を加えながら、口演したのではないか。『イリアス』第一歌で、テティスが自分の子アキレウスを哀れみ、ゼウスに名誉回復を願い出る場面も同じモチーフのヴァリエーションとして考えることができ、このようにいくつかの要素を組み合わせた大きなモチーフが様々に用意されていたであろう。

それらは各部分には詩人個人の独創性が表れているといえるが、同時に全体として大きなモチーフを構成する表現の一部であり、広い意味での‘common stock’として捉えられる。その意味で、両詩が同じシステムによって作り出されたことは明らかである。但し、それは Usener のように、口承詩論を離れて分析論的に解釈してではなく、むしろ、口承詩論をさらに押し進めた結果としてそういえるのである。

Usener が ‘typischen Szenen’ と ‘individuellen Szenen’ とに分けて考察しようとした姿勢は、一見、厳密性を求めようとする妥当な手法であるように思われる。だが、それは彼が口承詩論を語句をつなぎ合わせていく限定された技術としてしか認識しておらず、それでは詩人の独創性が評価されないという判断に基づく措置である。その点で、彼は口承詩論を軽視している。実際は、今見たように ‘individuellen Szenen’ もより大きなモチーフの部分として、‘typischen Szenen’ を構成していることもあり、各叙事詩において、両者は極めて複雑な構成となっていて容易には分類出来ないものである。また、即興の場でそのような複雑な構成を持った作品を作り上げることは詩人の裁量に任されていたのであるから、詩人の独創性をそこに見るべきであり、Usener のような分析論的手法ではかえってその点を見過ごしてしまう問題点がある。

そういう意味で彼の分析は大きな過ちを含んでおり、それ故、そこから導き出された結論も妥当なものとはいえない。

ここで、彼の結論について、2つの点で反論する。

〔1〕『オデュッセイア』の詩人はほぼ現在の形の『イリアス』を知っていた、と彼は考えているが、それはテキストの固定化という仮定をしなければ説明できないのであろうか。

両詩に先行して、トロイア戦争をめぐる様々な英雄の伝承が存在したと考えられるが、両詩が作られるにあたって、その中から数多くのエピソードが取捨選択されたことであろうし、例えばある詩人は、絶対的な力を持つ運命と神の支配する世界を舞台背景に、短命ながらも名誉を追い求める最強の英雄アキレウスの怒りというテーマで全体が貫かれた叙事詩を作った。そうすると、その詩の基調は悲劇的かつ緊張度の高いものにならざるをえない。また、そのテーマの設定より、この詩は怒りの始まりから終息までが描かれることになり、その後を訪れるであろうアキレウスの死については特に取り上げられる必要もなくなる。取り上げたために、かえって詩の調子が間延びしてしまい、緊張度が薄れてしまえば、詩全体が台無しになってしまう恐れがあるからである。そのようにして出来た詩が、後に『イリアス』と呼ばれるようになったものとする、これはアキレウスの怒りというテーマで全体を貫かれ、絶対的な運命と神の支配する世界の中で死すら恐れず名誉を追い求めることで輝きを見せる英雄の生き様という大きな枠組みを持った完成度の高いものとなっているため、後に詩が口伝に継承されていく際にも、細部に変更はあっても大筋としては変わりようがない。

従って、テキストの固定化と文字の助けをかりた伝承ということを特に仮定しなくても、『オデュッセイア』の詩人の頃から現在まで『イリアス』という叙事詩が大筋として形を変えることなく継承されてきたと考えられる。

〔2〕『オデュッセイア』において、『イリアス』の物語の筋があまり紹介されないことについて、彼は、『オデュッセイア』の詩人が『イリアス』に対して模倣ではなく、創造的な形での競合をはかったからであると考えている。しかし、彼の解釈は2つの大きな点を見落としている。

・〔1〕でも述べたように、『イリアス』は、絶対的な力を持つ運命と神が支配する中で翻弄されながらも武勇を発揮し名誉を求めていく英雄の姿を詠ったものであり、一方、『オデュッセイア』は、既に戦争が終わり、平和で落ち着いた世界を舞台としており、善悪の基準がはっきりと定められ、死よりも生、武勇よりも知略を尊ぶ価値観を背景にオデュッセウスの冒険と帰国を描いたものであって、両詩の世界観は著しく異なっている。それ故、『オ

デュッセイア』の詩人が『イリアス』を知っていたとしても、世界観の大きく異なる作品の描写を直接取り入れるわけにはいかなかった。

・『イリアス』、『オデュッセイア』以外にも数多くの詩人がトロイア戦争を巡る英雄の叙事詩を詠っていたと考えられ、聴衆にとっても、その戦争の経緯や英雄の活躍は既知のものであり、『オデュッセイア』の詩人が何もかもを語る必要はなかった。むしろ、語らずに暗示的なやり方で示す方が、一層効果的であり、何を語らないかも詩人の腕の見せ所ではないか。

IV

このように Usener の研究について検討し、その成果と問題点を指摘したわけであるが、その試みを踏まえた上で両詩の関係について考えていきたい。

Parry 以降の研究によって明らかになったことは、両詩が長い口承伝統の結果として現れた作品であり、豊富に蓄積された定型句などを即興で組み合わせながら韻律に合わせて紡いでいくシステムの中で作り出されてきた作品であるということだった。しかし、上で行った考察より、このシステムは語句を組み合わせるのみならず、それによって出来た詩行、さらには節をも、全体としてより大きな伝統的モチーフを構成する要素として組み合わせしていく機能をもつものと考えられる。Usener が独創的部分として考えたものも、口承伝統の中で蓄積されてきた語句群・表現として見なしうるし、詩人がある表現を創作したとしても繰り返し利用され、伝統的要素として働いていくというように、両者は複雑に絡み合い、分かちがたいものとなっている。それをどのように利用し、新たな表現を作り出していくかということは、詩人の手腕にかかっており、そこに詩人の独創性が発揮される訳であるが、このシステム自体は口承伝統の中で作り上げられ、発達してきたものであろう。

Usener が ‘Iterata’ という点に着目して両詩の関係性を論じたことで、彼の意図を越えて、両詩が同じシステムの中で生み出されてきた作品であるということが改めて明らかにされたわけである。その意味で、両詩は極めて近い関係であるとはいえるし、『オデュッセイア』の詩人が『イリアス』をよく知っていたといえよう。

しかしながら、それだけでは、両詩の詩人が同一人物か否かというところまで厳密にいうことは出来ない。それは、語句・表現の面では、両詩の詩人の独創性が見えにくいからである。確かに、‘common stock’ としての語句群、モ

チーフから、どのように選択し、組み合わせるかということは詩人の裁量に任されている部分が大きいいし、そこに詩人の世界観や意図が反映される⁽⁸⁾。『イリアス』の場合であれば、アキレウスの怒りというテーマと死を恐れず名誉のために戦うという価値観、詩人の世界観によって大きな枠組みが作られている。

しかし、物語の背景、文脈、聴衆の反応などを踏まえて、その状況に適した形で、即興で組み合わせていく口承詩のやり方においては、演じる度に用いられる表現が少しずつ変化することも大いにあり得るため、語句・表現の共通性や相違が、そのまま両詩の詩人の関係を表しているとは言い難い。

だが、その関係がどうあれ、両詩の詩人は共に‘common stock’の利用を始めとする口承詩の伝統的技法に熟達し、かつ、その伝統を踏まえた上で、独創性を発揮しながら新たな作品を作り出していったものであることには違いない。そして、そのようなあり方そのものが詩人の卓越性を示しているのである。

註

煩雑を避けるため、長音は省略した。なお、テキストとしては、D.B.Monro et T.W.Allen: Homeri Opera I - II, Oxford, 1920³, T.W.Allen: Homeri Opera III-IV, Oxford 1917², 1919² を用いる。

(1) Milman Parry, The Making of Homeric Verse. The Collected Papers of Milman Parry, ed. by Parry A., Oxford 1971.

(2) Knut Usener, Beobachtungen zum Verhältnis der Odyssee zur Ilias, Gunter Narr Verlag Tübingen, 1990.

(3) Parry 以降、‘Iterata’を扱った研究もないわけではない。Peter Roth, Singuläre Iterata der Ilias (Φ-Ω), Frankfurt 1989.; Norbert Blößner, Die Singulären Iterata der Ilias Bücher 16 -20, Teubner 1991., etc. しかし、『イリアス』と『オデュッセイア』の関係に触れたものではない。

(4) ‘common stock’について、Parry, op. cit. P. 2. 要するに、詩人と聴衆が共有している(common)表現や知識の持ち合わせ(stock)ということである。

(5) ‘typischen Szenen’とは、決まり文句やパターン化された場面のことであり、‘individuellen Szenen’とは、詩人個人の独創による場面を指している。

そして、Usener は、後者に着目することで各詩の詩人の特徴とその関係を探ろうとする。

(6) このことより、Usener は口承詩論では両詩の関係は説明できないとしている (P.208-214) が、Ⅲで述べるように、それは誤りである。むしろ、複雑な構成を持った両詩の関係を説明するのは、分析論的に部分部分に分けて説明する彼の手法では困難であり、作詩のシステムとして考える口承詩論でしか説明はつかない、と論者は考えている。

(7) P.2-3. しかも、Karl Sittl, Rudolf Peppmüller, Walter Diehl など、かなり古い世代の分析論派の学者の説である。

(8) 論者は、博士論文『『イリアス』、『オデュッセイア』各叙事詩の詩人に関する一考察』で、表現面と世界観の両面から、両詩の詩人の比較を行っている。